



クリスマスの
5つのしずく

黒野 ている

potberry&apple pie

ちいさな手で
いっぱいいっぱい摘んできた
野生のベリーを蜂蜜で炊いて
部屋中に齒が浮くほど甘い香り

リンゴには砂糖とバターを
仕上げにシナモンと何かのお酒を

冷たく寝かせたパイ生地に
甘い甘いベリーと
少し苦味が効いたリンゴ
上にもパイ生地を載せて
熱いオーブンへ

ふっくら膨れて色づいて
パイの合わせ目から
ベリーがあふれ出る頃が焼きあがり
少し冷めれば 食べごろに
ほら とっても美味しそうでしょ

そうだね それはとっても楽しそうだけど
その 白い白い頬についた ベリーのジャムに
僕は ずっと惹かれてる

この店に訪れる日は 必ず雨だ。

ドアまでの砂利が冷たく沈む。

重くこもる、けれどどこか温かい音がドアの隙間から匂う。

誰か来ているのだと、ドアを開けるのをためらった。この店に来てこんな気持ちになるのは初めてだ。

傘を閉じドアに背をもたせて、今日来たことを後悔する。

あのピアノに軽い嫉妬を覚える。それ程にその音は甘く優しいのだ。それはまるで、幼い頃の母の卵焼きのように儂く切ない。

雨は私を一人きりにする。

曲ともいえないその音の流れは、次第に強く大きくなっていく。

ピアノは声質をわずかに変える。トロリとした艶から、芯のある透き通った堅さへと。

私はそのひとを見たくなり、背にしていたドアを大きく引いた。

ピアノの前に女性の後姿があらわれる。挨拶も忘れて、私はその近くに歩み寄る。

アップライト型のピアノの上の蓋が開かれていて音は天井に跳ね返る。

甘えた声も頑なな怒声も、いつもはこの中に閉じ込められていたのだろう。開放された音は楽しげに室内を飛び、彼女のまわりをぐるりと回っては消えていくのだった。

しばらくしたあと、音が止んだことに気がつかないまま、私はピアノと彼女を見ていたようだ。

演奏が終わったあとも、私の耳のなかには楽しげな音たちがまだ響きあっていたのだ。

彼女が立ち上がって上蓋を閉めようとした時、無意識のうちに手を叩いていたことに気付いた。

彼女は驚いたふうでもなく、丁寧に蓋を閉め終わるとやっところちらを向いた。

「ピアノを弾かれる方なのね」

「子どもの頃に、少しだけです」

私は小さな声で答えた。なぜそれがわかったのか。

「あなたはピアニストなんですか？」

私が彼女に尋ねる。彼女は首を横に振り、調律師なのだとやった。

「普段眠っているピアノを、たまには起こしてやらないとね」

この近くに住んでいるのかと聞かれ、そうではないと答えると、

「近ければ、あなたが弾きに来るといいのに」

「どうして私がピアノを弾くと？」

彼女は朗らかに笑って、言う。

「顔が、そう言ってる。私に弾かせてほしいって」

顔が赤くなるのがわかった。

「中のフェルトがだいぶ減ってきているの。でもまだまだ大丈夫。弾けるわよ」

ますます顔が赤くなるのがわかる。

「私はそんなに上手に弾けません。このピアノからあんな音が出るなんて、思ってもみなかった」

「上手に弾こうなんて思わなくていいのに。あなたには、あなたの出せる音があるのよ」

大柄な彼女は二階にいる女主人を呼ぶ。

まもなく降りてきた女主人は、私を見てうれしそうな声をあげる。

「まあ よかったわ。今いちばんいい状態なの」

あれから何度も何度もここへきて、このピアノの音を聞いたはずなのに。

彼女のおかげで少し温まった鍵盤が、そこにある。

手で伝えるものは、理論じゃない。

ピアノと対峙する私は、もう幾つもの時間を遡っていた。

憶えもない頃から見てきたこの黒い鏡。泣き顔さえ映してしまう純粋な鏡だ。ここに私は何を映していたのだろう。

椅子に腰掛けなおすと足にペダルが触った。頭の中に蘇るのは、練習曲ばかりだ。

何度も何度も繰り返し、思うような音が出なくて悔しい思いをした曲ばかりだ。それが今になってあふれるほど思い出される。

あの音が今出せるなら... その思いがあの音を出してみたい、に変わった。

名もないエチュードの数々、聞きかじりの曲。

いくつも幾つもの、思い出す暇もないほど指は動き、ピアノは静かに私の思う音を出してくる。

「いいでしょう？素直な子ですよ。」

女主人は、膝に指をおいた私の背中で言う。

「わかりました。今やっと。」

私は彼女を振り向いた。

あの頃は精密なコピーを目指していたのだ。

でも そうなろうとするほどピアノは嫌がったのだ。

自分の音を出してくれと泣いていたのだ。

その声が聞こえてなかったのだ。

雨の日は暮れるのが早い。

窓から見える景色の輪郭が空と見分けがつかなくなっていた。

また弾きにきてもいいですか、ともう一度振り向くと、そこには誰もいなくて、いつの間にか蓋を閉められたピアノが 静かにこちらを向いて笑っていた。

もう逢わないと決めて
こわれたおもちゃを抱きしめた子供のように
ひとり泣いていた
世界中がクリスマスだった夜のこと

だれかが窓を叩く
このあたりにシュナイダーさんの家はありませんか、と困った顔
それは サンタクロースのいでたちをした初老の紳士だった

トナカイが足を痛めて
仕方なく歩いてまわっているのだと

サンタさん、それじゃ一晩でプレゼントを配りきれないでしょう？
シュナイダーさんのおうちなら知ってる
一緒に手伝うわ
だって私、今夜は何の予定もないんだもの

私は車のキーを持って外へ出た

驚いたことに
サンタさんて魔法が使えるの！
煙突から入るなんて昔話。
お家について、その子のことを思い浮かべると
プレゼントはふっと消えて
その子の枕元に飛んでいくんですって
サンタさんもハイテクよね
ここだけのお話ね

だから 配り終えるのは思ったより早く
夜明け前にはすっかり終わろうとしていた

途中であのコの家の前を通ったとき
ちょっとスピード落として
まだついでる窓のあたりを見てたら
後ろの座席から
「ちょっと止めて」
って

あわてて車を止めると
この家にもプレゼントを届けなきゃ、と
サンタさんはゴソゴソ袋の中を探してた

サンタさん、この家には小さな子どもなんていないわ
だってここは...

サンタさんは 小さな箱を取り出して
私に差し出した

「今夜のお礼に」
そう ひとこというと
サンタさんは消えてしまった

待って
サンタさん
私が届けるなんて

でも サンタさんのプレゼント
夜が明けるまでに配り終わらないと

私は車を降りて
白い道に足を降ろした
私はサンタさんみたいに魔法を使えないから
プレゼントを飛ばすことなんてできない
ここに置いて帰ろう

もう 逢わないって

決めたんだもの

玄関先に小さな箱を置いて
わたしは戻りかけた
すると 明かりのついていた窓があいた

彼は私の名前を呼んだ
もう私は動けなかった

サンタさん、ずるいよ
わたしに こんなプレゼントを置いていくなんて...

昔からの言い伝え

深夜に星を飛ばして
落ちた方向にいいことが待ってる
次は僕の番

星屑を握りしめた僕は
あさっての方向を向いた
そんなことで幸運が来るなんて
年寄りの戯れ言さ

振りかぶって投げた星たちは
それぞれにぶつかり合いながら
方向を見失い
その中の大きなひと粒がスーッと落ち
響きわたる轟音

どこへ落ちたのか
どんないいことが待ってるのか
僕たちは期待半分で探しに行った

大きなモミの木の枝を何本か折り
積もった雪を散り飛ばし
その下に大きな大きな穴を開けた馬小屋の屋根
仲間はおびえて逃げ帰り
ひとりになった僕が
おそるおそるノックする

重い木の扉の内側から不機嫌な返事
事情を話すと君が睨み返す

「あんたのせいで びっくりして
6匹も生まれちゃったじゃないの」

藁を敷いた床には黒い母猫と
じわじわと僕を見つめる12粒の黒い宝石たち
「早いとこ元に戻してよ 風邪ひいちゃうこの子達」

産まれた仔猫の数は僕のせいじゃない
さてどうするかなあ

床にまだ残る星屑がすまなさそうに点滅する
そのなかの暖かそうな色のを拾い
僕のマフラーでくるんで猫の新しい家族の暖を取る
不安げに鳴いていた猫たちは
君と僕の手のひらの下で やがて静かに眠りにつく
それから

Can we stay a little longer?

マリアちゃんちの小屋の屋根から
のぞいていた星空は
ゆるやかに回りはじめる

早朝の空港は人影もまばらだ。

いつもこの空港には、彼のものではないゴロワーズの匂いがする。

朝一番の飛行機で発つなんて粋なようだが、生憎冬のヨーロッパは夜が長い。まだ漆黒の闇の中に彼の乗る飛行機がライトに浮かんでいるのが見える。

外は凍りつく寒さだろう。雪がないのがせめてもの救いだ。

搭乗時間を待つ彼は無口だ。

わたしも今更話すことはなく、行き先の住所を聞くこともない。

熱いコーヒーでもと思うが、この時間に開いている店もない。

最後の会話...

あの家を出る朝、彼がなにかを探していると言った言葉が、薄ら寒いエアコンの風に乗ってそっと思い出される。私は彼に問う。

「探しものはみつかったの？」

彼はゆっくりと首を振り、私を見る。

「なにかを忘れてきたような気がするんだよ。」

心の奥で何かが激しく揺れる。慌てて知らないそぶりで、時間を確認する。

「今から間に合うかしら、それともあとで送ろうか？」

バッグの中の車のキーを握り、立ち上がりかけた。

「いったい何を」

「君への想いをね」

目が合い、彼は小さく笑う。

「どうもあの庭に置いてきたようなんだ。」

待ってよ なぜここまで来て、それを？

わたしはフランス人でもなく、上手には言いかえせない... 言葉をのみこんで高い高い天井を仰ぐ。

彼はそのあと一言も話さないまま、搭乗の時間が近づいていくばかりだった。

このまま彼が飛行機に乗ってしまえば、わたしたちは二度と会うことはない。お互い行き先も知らない、未知への旅だ。

わたしは返事をするのをためらい、いつしかそれも諦めた。

今は記憶を呼び戻す時ではない。忘れ物のままでいい。そのまま雪に埋れ、長い冬を越して忘れた頃に誰も知らない小さな野花になればいいのだ。中途半端な感傷に浸っていては、北の国の冬は過ごせない。

ため息のような吐息をついて、彼は言う。

「君との一番いい思い出は、あの家に閉じ込めておくよ。どこにも持っていく必要はない。君を愛していた。けれど愛は形を変えた。」

それはその通りだった。わたしはじっと濃い霧に包まれた景色に目をやっていた。

「でも、それは結果よね」

「そうだ、結果だ」

わたしの心には、あの頃の思い出が風のように流れる。

もっといろんなことをしてあげたかったし、もっといろんな話をしたかった。どうしても自分の位置をたしかめられずに彼にあたっていた。

小さな棘はあちらこちらにあったけれど、彼のためだと胸にしまった。人知れず流す涙が枯れたとき、あっさりとは別れはやってきた。

いや、そんな最近のことだけじゃない。もっと甘やかな時間はあったはずだ。

「わたしとの一番いい思い出って、何？」

随分安っぽい問いかけだった。こんな時に相応しい言葉がでてこない。

半端な時間が小さな悔しさを連れてくる。

「やめよう。」

彼は静かな笑顔で言った。

なぜと聞けず、会話は終わる。

わたしのなかで感情の最後の扉がかちりと締まったような気がした。

思えばいつも彼はこうだった。

わたしはいままで、その開かずの扉をあけようとしたが叶わず、その前で動けずにいた。今日その扉を開ける鍵は、はるか遠くにいてしまうのだ。

いいようのない不安と、未来を照らす光がわたしのところに映っていた。ひとりこの土地に暮らそうが、わたしの故郷に帰ろうが、それは変わらないだろう。

人の動きが変わったような気がしてあたりを見ると、霧が薄らいで機体の輪郭がわかるようになってきた。

無言のまま、彼は立ち上がる。

わたしもそのあとおそるおそる立つ。

彼の荷物を持つようとして手が触れた。笑みを作って顔を上げると、彼は困惑の表情でわたしを見ている。迷惑だったのかと荷物を持った手を離そうとすると、その手を上から握り返され、

「そんな顔しないで。さっき言っただろう？愛は形を変えた。でも失ったわけじゃない。」

「わかってるわ。」

いつもの優しい目が近づいてくる。

「心から笑える日が来るように・・・」

ひとつ咳払いをして Salut...と手をあげる。

しばらくして、彼は搭乗口へ吸い込まれるように見えなくなった。

飛行機はまもなく飛び立ってゆく。呆れるほどその瞬間は短く 趣もない。

冷え切った車に乗り込むと、まだ誰もいない勤務先に休暇願いのメールを送った。

エンジンがしっかり暖まるまで待って、ゆっくり走り出す。行き先は あの庭だ。

郊外へと向かう幹線道路。凍った木々の枝。

少しずつ暖まってきた温風にも、指先はこごえきったままだ。幹線を離れ、まだ車の少ない通いなれた道に出て、いつもの角を曲がる。

「売家」と書かれた札を貼り付けられたその家は、寂しそうにわたしを待ち受けていた。

まだ 鍵なら持っている。誰かにとがめられたら 忘れ物を取りに来たと言おう。

遠慮がちにドアを開けると、すべての思いを消去したようにがらんとした空間が広がっていた。

作りつけの家具の他に、ひとの気配がなにも残っていないことに安心する。

ここを出る前、最後に確認したのはわたしだった。部屋を回ると、時間がそのまま静かに置き去りにされている。こんなにも自由で広い空間だったのだと感ずるのは、この家を買うために見に来た時と同じだ。

壁の小さなすり傷もそのまま、窓枠には古い飾り鍵がついていて、錆びついて重いのでめったに開けることはなかった。

その居間の窓から凍えた木々の寄り添う庭をのぞいた。針葉樹の群れは黒く、逃げる足もなく極寒の日々を迎えようとしている。

赤い花が咲いている・・・？

この厳寒期にそんなはずはない、と重く大きな窓を力の限り開く。
凍りつく風と共に赤い花も揺れる。

庭に降りたち近づくと、それはひいらぎの枝に結ばれた赤いリボンだった。何かのしるしなのかとあたりを見ても、なにも変わったところなどない。

霧に濡れて凍りかけのベルベットのリボンをほどくと、明るく光るものが踊った。

リボンの端からほろりと落ちかけてあわてて握り締め、手のひらを広げると、そこには小さなリングがあった。旧い時代の細工、これは形見のアンティークのリングだ。彼のおばあさまが小さな彼へ、お守り代わりに譲られたのだと聞いた。

どうして。

わたしが必ずここに来ると信じていたのか。まさか。

あわてて携帯を取り出して彼にコールしようとして、機上の人だということに気づく。

わたしに手渡せば受け取らないことを知っていて、こんなことを。ハンカチに包めば失いそうで、そっと指にはめてみる。細いリングは、すいつくように私の薬指におさまる。

失ったわけじゃない。

彼はそう言った。

仲が悪かったわけではない。言い違いはあったが、お互いを責めることはなかった。

ただきっと最後にお互いを受けとめるころの底に空いた穴を埋めるには力が足りなかったのだ。

彼との時間が穏やかな力となり、いつも心の奥底に存在するような、そんな気持ちがじわじわと湧いてきた。

形を変えて、愛は・・・ここにある。

わだかまりの塊は、熱い涙が溶かしてゆく。

積み重ねた日々をゼロにしてしまうような別れではなく、あの日々があったからこそ温かい出発ができるのだ。

ありがとう、心から喜べる日がこんなに早く来るなんて。

ありがとう。

時折吹く強い北風に時を教えられ、わたしは立ち上がった。

いつしか粉雪が舞い始めた裏庭は静かに景色を白く塗りかえ、玄関までの小道に真白な絨毯を用意する。清らかな結晶がわたしたちの記憶を誰にも触れられぬよう大地の下に隠してゆく。

もう二度と開くことのないドアの鍵をわたしは閉めた。

クリスマスの5つのしずく

<http://p.booklog.jp/book/88429>

著者：黒野 ている

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/naomur/profile>

発行：2015.12.24

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88429>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88429>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ